関東10ゼミ討論会で優秀賞と論文賞

商・奥瀬ゼミ

自分を変えるためにお金を使う

〝変身消費〟を研究

「斬新な発想」に高い評価

商学部の奥瀬喜之ゼミの3年次生は毎年、マーケティングを研究するゼミと「関東10ゼミ討論会」（＊）を開き、研究成果やプレゼンテーション力などを競っている。12月4日に学習院大学で行われた大会に参加した3チームのうち田中彩子さん、上本英さん、武田麻耶さん、細越洋希さん、大野美波さんが46チーム中2位にあたる優秀賞と優秀な論文に対して贈られる論文賞を獲得した。

自分を変えるために使うお金＝「変身消費」を研究したいと集まったメンバーは「変身消費のニーズを喚起させる刺激の解明～美容産業への活用～」をテーマに据えた。代表の田中さんは「手軽に『自分を変える』には美容院やエステなど、さまざまな方法があります。そのニーズは、自分自身を満足させたい『自分意識』と他人からの評価を上げたい『他者意識』からくると仮説を立て、ニーズがどのように喚起されるのかを解明して新たな提案を試みました」と語る。

専大生330人が協力したアンケートで、変身消費を喚起するには感情的なアプローチが効果的であることが判明。業界をしぼり、美容院を対象としたプロモーションとしモデルも自分たちが務めたポスターやチラシをデザイン。暖色系の色を使い、幸せや愛情、自分意識をイメージさせるものを仕上げ、プレゼンに臨んだ。武田さんは「1次・2次・最終と進んだので、最後は緊張せずに表現できましたが、しっかりしたフィールドワークをしていたり、聴衆の心を上手につかむプレゼンをしている大学もあり、もっと工夫する余地があると反省しました」。大野さんは「企業のマーケティング部門などの審査員の方々に、『変身消費』という斬新な発想は、幅広い消費分野に応用できる切り口だと評価していただき、自信になりました」と話す。主に分析を担当した細越さんは「論文は、連日終電近くまでファストフード店で話し合って練り上げました。行き詰まった時もありましたが、ベースボールビジネスアワード＝本紙前号既報＝の先輩たちがアドバイスしてくださり完成させた2万字近い論文は高い評価をいただき、先輩たちに感謝しています」。上本さんは「2年次のゼミでのテキストの輪読が下地となり、研究に取り組めましたが、自分たちで動かなければ、何も得られないこと。行動する大切さを改めて学びました」と話す。

大野さんは「グループの中で自分の存在意義を見いだし、どのように貢献できるか、自分と向き合った半年間でした」と振り返り、田中さんは「意見をまとめていくのは大変でしたが、個性があるからこそ面白い発想が生まれることも分かりました」とリーダーとして体験したことを話してくれた。

＊参加大学＝専修大、早稲田大、慶応大、立教大、学習院大、中央大、法政大、高崎経済大、駒沢大、多摩大

▲　喜びの奥瀬ゼミ生

商学部インターンシップ報告会

商学部のインターンシップ報告会が11月9日、生田キャンパスで行われ、3年次生13人が「インターンシップで学んだこと」などをテーマに研修報告を行った＝写真。

ネットワーク情報学部生の学外展示会

コウサ展2011　入場無料

テーマ―結　晶―

開催日時

1月29日（土曜11:00～18:00）
30日（日曜11:00～17:00）

会場

ミューザ川崎シンフォニーホール４F
企画展示室

特別イベント

・イラ×バト～パソコンでお絵かき～
・うごくんですカー～プログラミングしてみよう～

※コウサ展ホームページ
http://www.ne.senshu-u.ac.jp/~kousa2011/

ネットワーク情報学部

学びの成果を披露

◀　望月ゼミ

◀　山下ゼミ

プロジェクト発表会2010

3年次の必修科目「プロジェクト」は、学生主体のグループワーク。1・2年次での学びを生かし社会の諸課題をIT（情報技術）を用いて解決し、チームで成果を出すことを体得する。

12月11日に生田キャンパスで行われた今回は、生田キャンパスに隣接する岡本太郎美術館の協力を得て、美術館初心者の学生でも楽しむことができるツール「ハローミュージアム」（望月俊男プロジェクト）や、高齢者の食生活を豊かにするツール「eatumo」（山下清美プロジェクト）、将来の目標がない若者に充実した未来を設計させるためのツールをつくる「みらいON」（中村友保プロジェクト）など25のプロジェクトが、研究の成果を披露した。

当日は高大連携協定校の県立座間総合高校の1日体験入学も行われ、生徒たちもプログラムの一環としてプロジェクトを見学した。

コンテンツデザインプログラム

理科学習コンテンツを制作

2年次のコンテンツデザインプログラムを学ぶ学生32人が、多摩区登戸小学校5年生の理科「水のはたらき」の学習に関連した体験型学習教材を開発し12月20日、同小学校で最終発表を兼ねた交流会が行われた。

8つのグループが「雨水のはたらきを観察しよう　ウォッチ」「川のしん！うん！たい！」「れきたび―川の歴史」「みてふれ　イシコロッ！」「ビーブ君と学ぶ川の防災施設」「あめどこーあめはどこに行くのか？」「サカナの目から魚ッチング！」「ぼくをおうちにつれてって！」というタイトルで、体を動かしたり、模型を動かしたり、パソコンを操作したりしながらクイズ形式で知識を確認できるなどの工夫を施した教材を披露した。

今回の開発は多摩区からの委託事業として行われており、児童たちにとって身近な「多摩川」がテーマ。今後は一般向けの公開イベントを2月に予定している。

文・田邉ゼミ生

「一生の宝ものの思い出に」

NHK教育テレビ

「ニュースで英会話年末スペシャル」に出演

12月19日、NHK教育テレビで放送された「ニュースで英会話年末スペシャル」に文学部・田邉祐司ゼミ生と大学院生が出演した＝写真。

今回は2010年度の大きなニュースを題材にその話題に関連した実用的な英語表現を学び、視聴者が携帯でクイズに参加する双方向番組として放送され、シンプルな物事を伝える上でもさまざまな英語バリエーションがあることを伝える「LET'S TALK」コーナーで8人が取材を受けた。そのうち「はやぶさ」について語った北島伸哉さん（平22文・科目等履修生）、ノーベル化学賞の鈴木・根岸両教授に語りかけた高橋広野さん（文4）、3Dについてコメントした小林大介さん（文学研究科2）のインタビューがオンエアされた。出演した感想を聞いてみた。

▲　田邉ゼミ生の撮影風景

北島さん「人生初のテレビ出演が英語のインタビューになるとは思いもよりませんでした。入学当初、英語が話せなかった私が、英語でお茶の間に登場するなど夢のまた夢だったからです。わずかな時間でしたが、4月から神奈川県の公立高校の教壇に立つ私にとって、大いなる自信を与えてくれる忘れられない出来事になりました」。

高橋さん「テレビに映る姿を見て正直、自分の英語のいたらなさを感じました。英語教師を目指す者がまず求められるものは何と言っても『本物の英語力』。現時点での実力を確かめることができたこと、英語の改善点を再確認できたことが、何よりの収穫でした」。

小林さん「田邉先生から学んだ英語上達のコツの一つに、学んだもの（input）を公的な場で出す（output）という手法があります。テレビカメラの前というのは公的な場の『極地』でした。緊張しましたが、おかげで今もあのとき話した内容は私の中に残っています。春から静岡県の公立高校で教鞭を執りますが、生徒ともその体験をシェアしたいと思っています」。

指導してきた田邉教授は「『take7』（取り直し7回）の猛者もいましたが、カメラの前で自分の意見を英語で語るというまたとない経験は、彼らにとって一生の宝ものになるでしょう。東大、早大などの学生も出ていましたが、うちの学生の英語は彼らを完全に上回っていました。私自身の指導が間違っていなかったという確認の場でもありました」と教え子たちの奮闘を高く評価している。